

# 明末清初の記憶と懷舊——余懷と姜垓の交遊を手がかりに——

小塚 由博

はじめに

一. 姜垓——その人物と作品——

1. 姜垓とその家族および交遊關係

2. 作品

二. 余懷と姜垓——甲申の變後の交流——

1. 姜垓との再會——『楓江酒船詩』——

2. 『三吳遊覽志』中の交遊

3. 姜垓を悼む

おわりに

はじめに

明末清初の文人余懷（字は澹心。一六一六—一六九六）はその著『板橋雜記』（卷下）で友人姜垓（二六一四—

萊陽の姜垓(如須)は、李十娘(明末の名妓)の家に遊んで女色に耽り、しばらく家から出てこなかった。方密之(名は以智)と孫克咸(名は臨)は屏風の上を歩けるほど身軽だった。丑三つ時が過ぎ、天の川が輝く頃になって連れ立って行き、趙家や李家の妓樓を過ぎると、簾はおりて戸は閉ざされ、静まり返っていた。二人はひよいと屋根へ登ると、まっすぐ寢所へ向い、カーテンをめくって押し込み強盗のような勢いで飛び込んだ。如須はベッドを降りて跪き、「命ばかりはお助けを、十娘には亂暴しないで下さい」と言った。二人は刀を投げ棄てて「三郎よ、何たるさまだ!」と言って大笑した。また酒を持ってこさせて酌み交わし、充分飲み盡くして散會した。恐らく如須の排行が三番目だから(「三郎」と呼んだの)であろう。如須には一代の才能があり、たまたま樊川(杜牧)や大傳(謝安)にならって妓女との遊びに興じたのであり、「秋風團扇」(前漢の班婕妤「怨歌行」)のような美女や、「掃眉」(唐の名妓薛濤)のような妓女に思いを寄せたのであって、遊里の世界に耽溺してしまったわけではない。聊かながら一文を記して、風流の余韻を記したまでである。

(萊陽姜如須、游於李十娘家、漁於色、暱不出戶。方密之・孫克咸并能屏風上行。漏下三刻、星河皎然、連袂間行、經過趙李、垂簾閉戶、夜人定矣。兩君一躍登屋、直至卧房、排闥拍張、勢如盜賊。如須下床跪稱、大王乞命、毋傷十娘。兩君擲刀大笑、曰、三郎郎當、三郎郎當。復呼酒汲飲、盡醉而散。蓋如須行三。如須高才曠代、偶效樊川、略同謝傳、秋風團扇、寄興掃眉、非沈溺烟花之比。聊記一條、以存風流餘韻云爾)<sup>(三)</sup>

以上のように、余懷は姜垓との思い出を語り、さらに明末南京の文人世界における風流な逸話(風流余韻)の代

表として紹介している。これは余懷にとって姜垓という存在が特別な人物であったということをも多分に表している。實際に以下本論で述べる通り、余懷は南京滯在期（崇禎十七（一六四四）年頃まで）から甲申の變（明・崇禎十七年、清・順治元年、一六四四年三月）を経て、姜垓が死に至る直前まで交遊があり、関連の詩文を多數残している。

以上のことから、姜垓は余懷の文學性を探る上で大きな手がかりとなるだけではなく、明末清初という動亂期を體驗した文人たちの複雑な心境を探る場合にも、極めて有用な好資料となるのではないだろうか、と考えられる。

以上の點を踏まえながら本論ではまず姜垓の出身・半生・交遊關係などを調査した上で、余懷との交遊について考察してみたい。

以前論者は余懷の作品中に描かれた妓女（三）と余懷の作品（主に詩）における杜甫の影響（三）について述べたことがある。兩論文の中心はどちらも甲申の變間もない余懷の動向と當時の心理的状況に關する考察であり、それが彼の文學にどのような影響を與えているのか、ということについてそれぞれ別角度から論じたものである。そこから垣間見ることができたのは余懷の甲申の變後十數年の間、江南各地を彷徨い、急激な時代の變化に戸惑いながらも作品制作を續け、その渦中に命を落とした友人や家族そして妓女たちを悼み、その心の傷を癒しながら生き續ける文人としての姿であった。これが後の『板橋雜記』制作へと繋がっていった要因の一つと考えられる。本稿で、姜垓という人物にスポットを當てたのは、先に述べた通り彼が余懷と同時代に生き、青春時代を共にし、その上明末清初の動亂の中で辛酸を嘗めた人物だからである。兩者の比較考察、とりわけ余懷が姜垓とどのように交遊し、作品に描いたかを見ることによって、この時代の文人たちの生き様を知る手がかりとしたい。

## 一・姜垓—その人物と作品—

### 1. 姜垓

#### a. 一生

まず姜垓の一生およびその一族について以下に簡単に述べておきたい。

姜垓の傳はその兄姜琛の傳（『明史』卷二百五十八）に附されているが、その分量は少なく、決して詳細とは言えない。このほか張其淦『明代千遺民詩詠』（卷一）、孫靜菴・傅有道『明遺民錄』（卷三十）、徐肅『小腆紀傳』（卷五十六・列傳四十九・遺臣一）、李桓『國朝耆獻類徵』（卷四百七十一・隱逸十二）、陳濟生・顧炎武・歸莊『天啓崇禎兩朝遺詩』、王士禎『池北偶談』（卷十四）などに傳があるが皆大體似たような内容である。友人である魏禧（叔子。一六二四—一六八〇）が墓表を、また友人徐枋（昭法。一六二二—一六九四）の「姜如須傳」、姜吏部如須哀辭并序」、更に門人である山陰の何天寵（仰山）が「姜考功傳」を制作している。

これらの資料によると姜垓、字は如須または皇輿といい、號は佇石山人、別號は篔簹と云った。また私諡を貞文と云った。出身は山東萊陽で、先祖の姜淮は田中より金を得て富豪となり、また倭寇の侵入を防いだ功績で懷遠將軍の稱號を授かったという。曾祖父の瑛は國子監生、祖父の良士、父の瀉里（諡は忠肅。一五八二—一六四三）は諸生という讀書人の家系であった。姜垓の兄弟姉妹は八人おり、その内男子は四名、長兄圻、次兄琛（字は如農、私諡は貞毅。一六〇七—一六七三）、弟坡がおり、垓は三男である。中でも琛と垓は「二姜」と稱されて才名を等しくしたという。

姜琛は崇禎四（一六三一）年に進士となり、やがて崇禎十五（一六四二）年には禮科給侍中となった。だが琛は崇禎帝へ諫言して怒りを買ひ、熊開元（魚山。一五九九—一六七六）とともに罪を得て百杖の刑に處せられた。姜垓の蘇生措置もあって何とか一命はとり止めたものの、そのまま獄に繋がれてしまった。一方の姜垓は崇禎十三（一六四〇）年に進士に合格し、行人（外國使節の接待役）となっていた。行人の廳舎に石碑があり、そこに魏忠賢派の崔呈秀と阮大鍼（一五八七—一六四六）の名前が東林黨の魏大中（一五七五—一六二五）の名と同列になっているのを見て、復社の一員でもあった姜垓は崔呈秀・阮大鍼兩名の名を削るよう上疏した。上疏は通り、削られることとなったが、これにより姜垓は阮大鍼の恨みを買うことになった。

崇禎十六（一六四三）年、萊陽が清軍によつて攻められた際、姜一族は父姜瀉里、四男の坡以下二十名以上の犠牲者を出した。この中には姜垓の正妻孫氏や兄弟の家族なども含まれていた。長兄の姜圻は重傷を負いながらも父の屍を背負つて逃亡し、魯監國のいる浙東までたどり着いた。姜垓はその報を聞き、上疏して投獄中の兄琛の釋放と、自分が身代わりとなつて獄に繋がれることを求めたが、却下された。翌崇禎十七（一六四四）年二月、姜琛は宣州（安徽省宣城縣）の衛に流謫となり、以降宣州老兵、または敬亭山人と號することとなった。

同年三月に崇禎帝が北京で命を墮とし（甲申の變）、南京で弘光帝（福王）が即位すると、阮大鍼が權力を持つようになつた。琛は恩赦によつて流謫を許されたが、再び仕えることはなく、蘇州に隱居した。また垓も阮大鍼との一件があり、南京を脱出して紹興の魯王朱以海のもとに參じた。姜垓は魯王より禮科給事中に任じられたが、間もなく阮大鍼の魔手が迫つたため、さらに寧波へと逃亡した。弘光帝が清軍に敗れると、蘇州虎丘に隱居して明室潜夫と號し、賓客を謝絶してただ數名の遺民とのみ交わり、文學や歴史について論じあつたという。この中に余懷も加わっていた。順治七（一六五〇）年には病氣を押して故郷萊陽に戻り、父を始めとする家族の法事を行ったが、

その後病状が悪化し順治十（一六五三）年二月二十四日に死去した。享年四〇歳であった。

以上のように、姜垓は余懷よりも家柄は格段に良かったが、明清交替期に様々な辛酸を嘗めたことに關しては、余懷と非常に近い人物であり、ある程度共通の認識を有していたと言える。

## b. 家族と友人

姜垓には息子がおり、名は寓節、字は奉世といった。實母の孫氏が故郷萊陽で難に殉じると、繼母の傅孺人に育てられた。傅孺人は慈母であり、寓節を立派に育て、寓節は父母の志を守って出仕しなかった。傅孺人は康熙二（一六六三）年に三十九歳で死去した。のち康熙十二（一六七三）年に父姜垓とともに合葬することとなり、友人の魏禧に父と母傅孺人の墓表を依頼した。寓節は崇禎十五（一六四二）年に生まれ、康熙三十八（一六九九）年に没した。享年五十八歳。寓節については錢儀吉『碑傳集』（卷一二六）「孝正姜先生寓節傳」、『國朝耆獻類徵』（卷四百七十一・隱逸十二）の記述に詳しい。

また姜垓の兄塚には二人の男子がいた。長子は安節、字を勉中または茲山といい、弟は實節、字を學在、號を鶴澗といった。二人は父の死後その志を守って清朝には仕えず、安節は父塚の死後、墓の側に廬を建てて棲み、實節は蘇州の虎丘に父と叔父姜垓を祀った祠を建てて「二姜祠」と名付け、自身はその側に諫草樓という廬を建てて棲み、父の著作を收藏したという。安節については、『明代千遺民詩詠二編』卷九、また實節については李桓『國朝耆獻類徵』卷七十一・王暉『今世說』卷七・『明代千遺民詩詠二編』卷三などに記述されている。

姜實節は父姜塚と同様に余懷とも交遊がある。姜塚については一六五〇年前後に制作された詩集『五湖游稿』と、一六六〇年代に制作された詞集『玉琴齋詞』に交遊の記述がある。姜實節についても『玉琴齋詞』に「鳳凰

臺上憶吹簫】送姜學在游金陵和顧庵」及び「【水調歌頭】雨中簡姜學在」がある。更に李漁評閱とされる傳奇『秦樓月』は姜實節とその妾陳素素がモデルとされるが、これに余懷が題詩を附けていることも特筆すべき点であろう。なお、實節は余懷の息子余賓頌とも交遊があった。

次に姜垓の友人について、代表的な人物を簡単にみておこう。

姜垓の友人は、やはり復社關係の者が多い。これは自身だけではなく、兄たち（圻・塚）も復社の一員に名を連ねていることも理由の一つと考えられる。<sup>(十一)</sup>

友人の一人である葉襄（聖野）は「姜貞文先生諡議」<sup>(十二)</sup>を制作しており、そこに連名として友人・門人併せて七十五人の名が記されているが、兄姜塚の同僚だった熊開元、復社の四公子の一人である方以智（密之。一六一一—一六七二）、詩人陸圻（麗京。一六一四—？）の弟陸坦（履常）、詩人の杜濬（于皇。一六一一—一六八七）、畫家の金俊明（孝章。一六〇二—一六七五）などの著名人も多數おり、さらに余懷も名を連ねている。

そのほか、吳偉業（梅村。一六〇九—一六七二）、曹溶（秋嶽。一六一三—一六八五）、徐枋、魏禧、宋琬（玉叔。一六一四—一六七三）、鄧漢儀（孝威。一六一七—一六八九）、林雲鳳（若撫。一五七八—一六四八）、また後述する杜甫詩の注釋者朱鶴齡（愚庵。一六〇六—一六八三）等と交遊があった。彼らの多くは東林・復社關係の人物である。なお、ここに挙げた人物は皆余懷の友人でもある。このことから明末の文人グループの一端を窺うことができる。

## 2. 作品

### a. 『流覽堂詩稿殘編』

『漁洋山人感舊集』卷二によると、姜垓の作品集として『篋管集』、『佇石山人稿』等があったようだが未傳である。現存している作品集は管見の限り『流覽堂詩稿殘編』（詩集）のみであり、これには一〇九題の詩が收められている。その他、王士禛『漁洋山人感舊集』卷一には四題の詩が、『明詩綜』卷六十九上には五題の詩が收められている。その詩風は「溫潤にして恂栗（引き締まっ<sup>十四</sup>ていて威嚴がある）」、「沈鬱離憂にして（『詩經』）三百篇の旨に愧<sup>十五</sup>じることはない」、「（その）歩みは少陵（杜甫）に近く、亂離の感慨が多い<sup>十六</sup>」などと稱された。余懷も姜垓の詩風について手紙で言及しているが、ここでは割愛<sup>十七</sup>する。

詩集『流覽堂詩稿殘編』は、主に甲申の變後蘇州へ隱居してからの詩が收められている。制作年が明確な詩は極めて少ないが、判明している作品を見ると、およそ順治二（一六四五）年から順治九（一六五二）年ごろの作品であると推定される。その詩の内容は、時期的に見てやはり家族・友人へ寄せたものや、遠く離れた家族・友人を思つて制作した詩が多い。たとえば、兄姜琛に關しては「憶長兄歌」（卷一）、「自眞州到郡留別二兄」（卷六）、「依二兄放舟訪弟奉和」（卷六）、「乙酉冬至和仲兄五首」（卷六）、「父に關しては「思親」（卷二）、「また妹に寄せた「別四妹」（卷三）、「家族の消息について述べた「戊子四月歸塗寓居膠東、愴心骨肉死生間隔、聊作七歌以當涕泣云爾」（卷一）、「姉の夫王文學（不詳）に寄せた「贈姉丈王文學」（卷三）、「長兄に寄せた「流寓廣陵、家書至、大兄歲暮抵京、在西曹留伴繫臣待恩」（卷六）等があるが、その詩はおおむねその安否や死を詠んだもので悲哀に満ちている。また、友人に贈った詩には、「放歌行贈吳宮尹」（卷三）、「吳梅村」、「和鄧秀才漢儀」（卷五）、「鄧漢儀」、「草堂偕林若撫分賦」（卷六）、「林雲鳳」、「和朱秀才鶴齡見寄」（卷六）、「朱鶴齡」等がある。その他、懷古詩なども多い。

また、明清交替期の詩人らしく、國家の興亡について思いを馳せたり、その中で自身が體驗した出來事等を詠じた詩も多數存在する。例えば、「哀喪亂詩」九首（卷六）には長文の自序が附されており、兄の投獄事件や、父や家族の殉難を中心に、甲申の變前後における姜垓自身とその家族の動向について詳しく記されている。

残念ながら文章は殆ど残っていないが、前述の兄姜琛の投獄事件後に制作した「請代兄繫獄疏」は、姜垓の傳記資料には頻繁に紹介されるほど有名であり、その文章は投獄中の兄の身代わりとなって獄に入つてまでも兄に親への孝行を盡くさせたい、という切實な思いに満ちている。

## b. 「七歌」

このように、姜垓の現存する作品は至つて生眞面目で深刻な内容のものが多く、『板橋雜記』に見られるような風流人としての痕跡は友人たちとの酒宴や旅行の際の詩に僅かに伺えるだけで、殆ど窺い知ることができない。しかしこれは、同じ時代を生きた余懷も同様である。たとえば甲申の變直後に作られたとされる「七歌」（在長州縣做杜甫七歌<sup>十八</sup>）は、杜甫の「七歌」（乾元中寓居同谷縣作歌七首<sup>十九</sup>）と同じく、當時の嚴しい社會狀況と、家族や友人を失つた自身の苦しい心境とが激しい口調で詠じられている。なお、姜垓にも「七歌」と名のつく詩が二題<sup>二十</sup>あり、一つは順治五（一六四八）年に制作された「戊子四月歸塗寓居膠東、愴心骨肉死生間隔、聊作七歌以當涕泣云爾」（以下「戊子七歌」と稱す）で、次々と失われていった家族のことについて、もう一つは順治七（一六五〇）年作の「庚寅五月承聞桂嶺消息、做同谷縣七歌、兼懷同年友大任平樂府七首」（以下「庚寅七歌」と稱す）であり、滅亡しつつある明王朝に對する感慨と戰地にいる友人を思う様子が詠まれている。この時期、余懷も姜垓も作品中に杜甫の影響が非常に強く見られる。これは杜甫が安史の亂以降成都に落ち着くまで各地を放浪し、大變な辛苦を受

けることとなったが、二人はそれに自らの身を重ね合わせていたのである。ここでは「戊子七歌」をみてみよう。  
「戊子七歌」は膠東（現在の江蘇省連雲港市）に寓居していた姜垓が、萊陽で難に殉じた父を始めとする家族について、その生前のエピソードを添えながら詠じている。一首目は父について。姜垓は故郷から都へ出發する際、何度も見送りの父を振り返って見たが、それが永遠の別れであった。二首目では母。甲申の變後の動亂では母を背負って逃げ回った。三首目では兄の圻、若い頃から詩賦に優れていたが、父とともに命を落としてしまった。四、五首目は姉と妹。ともに他家に嫁いでいたが、姉は命を落とし、妹は寡婦となってしまった。そして六首目では兄の塚について詠じている。姜垓は才能豊かで、高官へと出世したこの兄のことを非常に頼もしく思っていた。そしてその兄と肩を並べて仕事が出来ることが誇りだったようである。しかし、生眞面目さが仇になって皇帝の怒りを買ひ、罪人となってしまった。姜垓は精一杯盡盡力したにも拘わらず、兄を救うことはできなかった。幸い兄は後に赦されたが、姜垓の心を深く傷つけた出来事だったのは間違いない。このように姜垓は家族の事を詠じた後、最後の七首目で次のように詠じている。

丈夫生不逢時行偏側

丈夫 生まれて時行に逢はずして偏側す

垢身下氣老無力

身を垢けがし氣を下して 老いて力無し

驂騑從來顧主鳴

驂騑従り來りて 主を顧みて鳴き

遭閔皇綱速傾圻

閔に遭ひて 皇綱速かに圻を傾く

十年狼狽風塵中

十年狼狽す 風塵の中

冬葛夏裘臥荆棘

冬葛夏裘 荆棘に臥す

世俗重官復重錢

世俗 官を重んじ復た錢を重んずるも

慎勿向人訴緩急

慎んで人に向ひて緩急を訴ふること勿れ

男兒墮地最可憐

男兒 地に墮つるは 最も憐むべく

東西南北心啾啣

東西南北 心啾啣たり

嗚呼七歌兮歌思哀

嗚呼 七歌すれば歌思哀し

萬里爲我悲風來

萬里 我が爲に悲風をして來たらしむ

「大意」 男子として生まれて時運に恵まれずに行き詰まり、身を汚し氣力を失い老いて力なし。名馬たる驕

〈周の穆王が巡幸の際に用いた〉が主を顧みて鳴き、不幸に出會つて皇紀はあつという間に失われてしまった。

十年も俗世間をさまよい續け、春も秋も苦難の中に過ごした。世俗は出世を求めてその上金錢も重んじるもの

だが、慎んで人に無心を求めるのはやめるべきだ。男兒として落ちぶれるのは最も惨めなこと、どこに行つて

も心細い。ああ、七たび歌えば歌は哀し。我行く萬里、悲しき風が吹きつける。

この詩から、度重なる不幸に姜垓の心が完全に折れてしまっていた様子を窺うことができる。當時の彼の心中に

は出世や物欲は殆ど存在せず、かえつて家族のことが非常に氣がかりであり、しこりとなって残っていたようであ

る。姜垓の作品にはこのような内容の作品が多い。

むろん余懷にしても明清交替の苦い體驗を思い出に昇華して、懷古的な作品を制作していくのはかなり後の數十

年後のことである。残念ながら、姜垓の場合は甲申の變後十年もたたぬうちに四〇歳で死去したため、このような

作品の變化は見られない。

## 二. 余懷と姜垓—甲申の變後の交流—

余懷が『板橋雜記』中に見られるような廓遊びを行っていたのは、崇禎十二・三（一六三九・四〇）年ごろの事であつた。余懷は當時、南京兵部尙書の范景文（一五八七—一六四四。字は夢章、號は思仁。河間吳橋の人）のもとで書記官を務めていた。<sup>(二二)</sup> 范景文は東林黨の一員であり、嘗ては工部尙書も勤めたことのある重鎮の一人である。

『板橋雜記』の記述によると、<sup>(二二)</sup> 余懷が遊郭へ入り浸ることができたのは、彼を始めとする東林・復社の有力者たちの後ろ盾が強く關係する。後に余懷はこの頃の交遊關係について述懐しており、<sup>(二三)</sup> 様々な文人に混ざつて姜垓も登場する。余懷にとつて姜垓はともに平和な一時を過ごした親友の一人であつた。

ところで余懷は姜垓について甲申の變間もないこの時期、作品に多數遺している。以下にその作品名を擧げておこう。

1. 「擬古詩」八首（注に「隔河寄姜如須」とある）
2. 「吳郡五君詠」其二（注に「姜吏部如須」とある）
3. 「三哀詩」其一（注に「姜考功」とある）
4. 「海上碧雲歌寄姜如須」（以上1〜4 『五湖游稿』石湖卷所收）
5. 「相逢行」（注に「同如須用華山道士素詩體」とある）
6. 「吳門逢姜如須有贈二首」

7. 「雨中集飲周忠介公蓼菴與如須懷舊作五首」(以上5〜7 『楓江酒船詩』所收)

8. 「與姜如須」(周亮工 『賴古堂尺牘新鈔二選弃藏集』卷六)

9. 『三吳遊覽志』(日記) (四月十日、五月二十七、二十九日、六月十一、十二、十五、十六日)

1〜7は詩、8は尺牘で、9は日記である。<sup>(二十四)</sup>余懷が一人の人物に對してこれほど作品を制作することは珍しい、その點からも彼にとって姜垓が特別な存在であつたと考えられる。以下その主な交遊について述べたいと思う。

### 1. 姜垓との再會——『楓江酒船詩』——

#### a. 姜垓との再會

『板橋雜記』に見られるように、余懷は明末南京の遊里において姜垓と交遊を重ね、互いに風流人として浮き名を流した。だが、姜垓は前述の通り様々な重大事件に出くわして南京を離れ、一方の余懷は鄉試落第のショックで南京の棲霞山寺に隱棲してしまふ。<sup>(二十五)</sup>このような最中に甲申の變がおこり、二人はそれぞれ南京を離れてしばらく流浪の憂き目を味わうこととなる。余懷は順治元(一六四四)年五月、北京陥落の報を聞くと紹興へと逃れたが、年内には再び南京に戻っている。しかし、阮大鍼の東林・復社への彈壓が激しくなると、それに巻き込まれて家財を失い、再び南京から脱出せざるを得なくなった。その後數年間の余懷の動向についてはよくわからないが、一説には抗清運動に参加して各地を放浪していたともいわれる。その後、江南各地を轉々としていたが、少なくとも余懷は一度順治六(一六四九)年ごろには南京に戻り、元兵科給侍中の龔鼎孳(一六一五—一六七三。號は芝麓)や詩人紀映鐘(一六〇九—?)。號は伯紫)等と詩會を開くなど文學活動を再開していた。

一方、姜垓がいつ頃まで魯監國の元にいたのか不明であるが、早々に官を辭め、兄とともに蘇州吳縣に隱居した。また、戊子（順治五（一六四八）年）には膠東に寓居していたが、後述の通りその後再び蘇州へと戻った。

そして具體的にはいつどこでなのか不明だが、余懷と姜垓は再會を果たすこととなった。おそらく、二人の活動狀況から考えて蘇州邊りではなからうか。順治七（一六五〇）年作の『三吳遊覽志』では既に姜垓と行動を共にしていることから、少なくともそれ以前に再會を果たしていたと考えるのが妥當であろう。いずれにせよ二人はその後蘇州において酒宴を開くこととなった。その時の様子を描いたのが余懷の詩集『楓江酒船詩』である。

## b. 『楓江酒船詩』

『楓江酒船詩』は余懷の甲申の變直後における動向を知る上で非常に貴重な資料であるが、残念ながら現存しているのはその殘片である。<sup>(二七五)</sup> 目次によるとこの『楓江酒船詩』には二十四題三十八首の詩が收められていたと推定されるが、残念ながら現在では四題十首しか残っておらず、その全容は不明である。しかも殘存のものも判讀不明箇所が多數存在する。<sup>(二七七)</sup> しかし甲申の變後各地を放浪していた余懷の動向と心境を窺う上で非常に貴重な資料であるとともに、當時の文人たちの動向の一端を窺える資料であることは間違いない。

楓江とは蘇州市内を流れる川で、有名な唐の張繼が詠じた「楓橋夜泊」の「楓橋」はこの川に架けられていた橋である。ここは北京と杭州を結ぶ大運河と交わるため、水路の要衝でもあった。余懷は甲申の變後、姜垓を始めとする嘗て南京で平和な時期を共に過ごした同人たちとここに集まり、酒宴を開いた。

姜垓は「楓江酒船詩」に序文を制作している。<sup>(三七八)</sup> この序文は特に印刷が悪く、判讀不明字が特に多いが、その内容はおおよそ以下の通りである。

まず姜垓は、『詩經』以來の詩の歴史を概説しているが、傾向として李陵・蘇武・杜甫など故郷を遠く離れ、悲痛な感慨を詠じた作風の詩人を中心に述べている。次に自らが體驗した明末の話となり、「崇禎（一六二八—一六四四）の初め、僕は蔣陵（南京鍾山）に身を寄せており、余澹心とともに無位無冠の身であった（崇禎初、僕客蔣陵、與余子澹心同爲布衣）」と回想し、更に劉城（伯宗）・吳應箕（次尾）・孫臨（克咸）・錢棟（仲馭）・吳德操（鑑在）・方文（爾止）・方以智（密之）といった名士たちと交流を重ねた、と記している。彼らは復社の關係者であり、余懷の友人でもある。續けて姜垓は明清交替の混亂でその多くはこの世を去るか行方知れずになってしまひ、残つた者は余懷などごく少數であつた、といふ。<sup>二十九</sup>やがて二人は蘇州において再會し、楓江のほとりで酒宴を開いた。他の參加者は吳郡の曹溶（秋嶽）・吳縣の金俊明（孝章）、申紘祚（維久）・長洲の欽蘭（序三）等である。

姜垓は序文で宴會の様子について「茶店や屋形船、小屋や酒屋での宴會で詩を作らないことはなかつた。（中でも）澹心（余懷）の才がとりわけ鋭敏であつた。僕は客と詩を應酬したり、博打をしたりするのを楽しんでゐた。澹心はまた十數篇の作品を作つた。觀る者は（その才に）ため息をついて賞賛した（野店湖舫、僧寮酒舍之集、無不爲詩。澹心才最敏。僕方樂與客酣歌、賭賽抵戲。澹心輒復有十數篇。觀者嗟嘆爲異）」云々と述べている。

### C. 宴會の情景

また、參加者の一人朱鶴齡は「楓江酒船歌贈余澹心<sup>三十一</sup>」を制作し、以下のように詠じている。

余子白哲烏衣郎

余子白哲 烏衣の郎

楓江酒船琴瑟張

楓江酒船 琴瑟張る

擲箏美人坐兩旁

箏を擲く美人 兩旁に坐せしめ

參橫月落方浩倡

參横たほり月落つるも 方に浩倡す

痛飲不空金錯囊

痛飲するも 空しからず 金錯の囊

君才固宜草明光

君が才固より宜しく明光に草すべし

何爲浪跡長滄浪

何爲ぞ浪跡 滄浪より長ぜんや

誦君長句氣莫當

君が長句を誦ふれば 氣當たる莫し

少陵野老堪頡頏

少陵野老 頡頏するに堪えん

誰同調者萊陽姜

誰か同調する者ぞ 萊陽の姜なり

君今顧我浣花堂

君 今我を顧る 浣花堂

石蘭滿徑生清香

石蘭 徑に滿ち 清香を生ず

矯首咄嗒望八荒

首を矯げ咄嗒して八荒を望み

高歌呶憤神洋洋

高歌 呶憤して 神洋洋たり

黃公酒壚典鸚鵡

黃公の酒壚 鸚鵡を典し

惜君去鷁飛方塘

君を惜しみて 去鷁 方塘に飛ぶ

西湖曉薰施新粧

西湖 曉薰 新粧を施し

夾岸官槐鼠耳黃

夾岸の官槐 鼠耳黃む

權歌中流樂未央

權歌中流 樂未だ央ま

髣髴洛浦貽明璫

髣髴す 洛浦の明璫を貽るに

爲君作歌眉色揚

君が爲に歌を作りて眉色揚がり

楓江酒船酒難量

楓江酒船 酒量り難し

歸時無及雁南翔

歸る時 及ぶ無し 雁の南に翔ぶに

重來就我彈清商

重ねて來たれば 就ち我 清商を彈ぜん

〔大意〕 余子（懷）は美青年で烏衣巷の粹な風流人、琴の音響く楓江酒船の宴。箏をつま弾く美人が兩脇に侍り、參輝しんき月落ちてもどんちゃん騒ぎ。痛飲してもまだ盡きないあなたの詩、その才能は固より宮廷に出すほど立派なもの。何も滄浪より長ずる必要はなし、あなたの長句を諳んじれば、かなう者なし。少陵野老（杜甫）にさえ頡頏する才能で、これに同調するは萊陽の姜（垓）。君が訪ねて下さった我が浣花堂は、ちようど小徑に石蘭が満ち、芳しい香りを漂わす。（あなたは）頭を上げて叫んでは地の果てを望み、高らかに歌って親しみ、大きな氣持ちを抱いているご様子。（そんなあなたに私は）酒屋で着物を飲み代にして酒を買い、君を惜しむかのように去りゆく鶴も池の周りを飛び廻る。（これから向かう）西湖は風景粧いも新たに、兩岸のえんじゆ、ゴギョウも熟する季節。（岸を離れても）舟歌やまず、まるで洛神と曹植との別れのよう。あなたのために歌を作つて大きく目を開き、この楓江酒船の宴、どれだけ酒を空けたやら。（あなた方が）お歸りの際には南に飛ぶ雁を追うことなく（見送りしましたが）、またおこしの際は清らかな音楽を奏でて迎えましょう。

これによると、余懷たち同人は楓江から船に乗り、詩を詠みながら各地の友人を訪ね、最後は西湖までこぎ出した。その途中朱鶴齡の家を訪ね、酒宴を開く様子を描いたのがこの詩である。朱鶴齡の家が蘇州にあったことはわかつているが、それ以上詳しいことはわからない。恐らく少なくとも楓江の岸邊にあったのではないか。朱鶴齡の詩からは、美女を侍らせ、音楽が漂い、大いに酒を酌み交わしながら、詩作に興じる様子が窺える。そして、やは

りこの酒宴の主役が余懷と姜垓であつたことが窺える。なお、姜垓には朱鶴齡に寄せた和詩がある。<sup>(三十二)</sup> 恐らく同じ場面の作品であろう。

ところで朱鶴齡は『杜工部全集』の注釋者として有名で、また順治七（一六五〇）年に松江で吳炎等復社の遺民によつて設立された驚隱詩社の社友でもあり、他に顧炎武や歸莊等五〇名ほどが参加していたといふ。<sup>(三十三)</sup> 余懷も當時南京の詩人等で構成される重九會なる詩社に屬しており、<sup>(三十三)</sup> 姜垓は兄姜垞とともに蘇州で班荊社という詩社を主催していた。この頃詩社は各地に多數存在していたが、おおむねその活動精神は愛國復明にあつたようである。余懷は後述の通り一六五〇年に南京より蘇州・松江など江南一帯を旅行し、様々な文人たちと交遊を重ねているが、その目的の一つは各方面の詩派と交流することだつたのではないだろうか。

#### d. 姜垓の余懷評

姜垓は序文で前掲のように余懷の才能を賞賛しているが、またその生き方についても次のように記して文を結んでいる。

昔（宋の）王禹偁（九五四—一〇〇一）は『五代史（闕文）』を作り、司空圖（八三四—九〇八）に俊才有りと稱した。<sup>(三十四)</sup> 黃巢の亂に出くわし、皇帝（唐の昭宗）が都を追われると、司空圖は中條山に逃れて詩文を制作して自ら楽しんだ。當時の士人でこれに従う者は多かつた。この時盜賊が跋扈したが、ただ（司空圖の住む）王官谷（中條山中の地）だけには入らなかつた。後に昭宗が都に戻つて即位すると、司空圖を召し出そうとしたが、宰相の柳璨に退けられてしまった。その上朱梁（五代の後梁）の軍門に下つた李振や杜曉のような者も、

最後には死を免れなかった。ただ司空圖だけは終身二朝に仕えなかった。余子（余懷）が志すところも司空圖とほぼ同じである。その次第によつて（考えれば）このような結論に至ることとなった。今後この『楓江酒船詩』をご覧になる者がいれば、余子の人となりがこのようであつたことを知るだろう。

（昔王禹偁作五代史、稱司空圖有儁才。會逆巢亂、車駕播遷、圖避地中條山以詩文自娛。士人多徑依之。是時盜賊充斥、獨不入王官谷。後昭宗反正、召見之、爲柳璨所抑。且其後委質朱梁、如李振杜曉皆不免。惟圖終身不仕。余子所志、與圖略同。僕因次第及之。後有讀楓江酒船詩者、且知余子之爲人亦如是也夫）

姜垓は余懷の身の振り方を司空圖になぞらえて賞賛しているが、それは姜垓自身が心中を整理出来ずにいた甲申の變前後の度重なる出来事に對して、自身とよく似た境遇を、文人としての活動を通して乗り越えようとしていた余懷の生き方に學ぼうという意圖もあつたのではないか。もしそうだとすればこの楓江の酒宴が姜垓の人生にとつて大きな出来事であつたといえるであろう。

## 2. 『三吳遊覽志』中の交遊

### a. 姜垓の嘆き

『三吳遊覽志』は順治七（一六五〇）年四月一日に南京を出發して蘇州・崑山・松江方面に旅行した際の日記であり、六月十九日までの二ヶ月半の出来事が記録されている。そして特筆すべきはその時々制作した詩文を隨所に掲載していることと、その際交遊した様々な文人たちとの具體的な事跡について述べていることであり、當時の文人たちの文雅な生活の一端が垣間見られる作品である。中でも多く登場する人物の一人がこの姜垓である。以下、

日附順にその様子を追ってみたいと思う。

まずは四月十日、蘇州半塘橋附近にあった姜垓の舊宅を通り過ぎ、詩を寄せている。<sup>(三十五)</sup> その一首を擧げておく。

別後相思寄酒狂

別れし後 相思ひて酒狂を寄せ

一蓑衝雨到山塘

一蓑の衝雨 山塘に到る

僧貧老卧菴中月

僧貧にして老いて卧す 菴中の月

客倦新移柳上霜

客倦みて新たに移す 柳上の霜

淚灑齊梁悲故國

淚灑ぐこと 齊梁のごとく 故國を悲しみ

魂招屈宋聚他鄉

魂招くこと 屈宋のごとく 他郷に聚む

重來莫近蘇臺望

重ねて來たるも 近づく莫し 蘇臺の望

花落梧宮春草長

花落つ梧宮 春草長し

〔大意〕 一別以來、互いを思つて酒に溺れたが、いま蓑を着て、叩きつけるような雨に濡れながら山塘に到る。

貧僧（たるあなた）は庵中老いてねそべり月を眺めるだけ、客（たる私）は飽きて泖水の霜に思いを馳せる。

（我々は）齊・梁の詩のように涙を灑いで故國を悲しみ、屈原・宋玉のように魂を招いて他國に集めた。何度もやってきたけれども、（亡國の象徴である）姑蘇臺には近づくことなし、花舞う梧宮（齊王の宮殿）は春になると草ぼうぼう（で見る影もない）。

一方姜垓はちょうど同じ時期（五月）に先にも觸れた「庚寅七歌」を制作している。これは當時廣西で清に抵抗

していた南明政權の情勢を聞いて詠じた詩である。一首目から四首目までは、明王朝を揺るがした李自成の亂以後

の出来事について綴り、その結果戦い空しく滅亡の淵に追いやられ、人々が戦火に追われて苦しむ姿が詠じられている。五首目は現在桂林にいるであろう南明の永曆帝（一六四七—一六六一年在位）について、六首目では十數年來會えずにいる友人について詠じている。この友人は永曆帝に付き従って桂林の平樂府におり、その消息を非常に案じていた。そして最後の七首目では、その友人も念頭に入れながら、以下のようにまとめている。

形骸衰困日何速

形骸衰困し日々何ぞ速かならん

羸老出入仗兒僕

羸老出入するに兒僕を仗とす

伸眉豈有廉節高

眉を伸ばすも豈に廉節の高きこと有らん

垂頭已愧鬢毛禿

頭を垂れて已に愧づ鬢毛の禿ぐるを

報恩復仇那徒然

報恩復仇 なん 那ぞ徒然たらん

人生遇合安可卜

人生遇合 いづく 安んぞ卜すべけん

嗚呼七歌兮淚縱橫

嗚呼 七たび歌へば淚縱橫

行路爲我心不平

行路 我が心の爲に平らかならず

〔大意〕 我が肉體はやせ衰え、一日一日が速く感じてしまう。我が老體は手助けがないと歩けぬほど衰えた。

（あなたの無事を聞いて）愁眉を開いてもどうして我が操の潔癖さが高いといえるだろうか、頭を垂れて鬢毛が抜け落ちてしまったことを恥じ入るばかり（辨髪へんぱつの事を指すか）。報恩や復仇はどうしていたずらに出来るだろうか。人生の出会い、誰にも豫期することはできない。ああ、七たび歌えば無盡の涙、我が行路は私の心を知ってか知らずか平坦ではない。

余懷も第二の故郷である金陵を戦火で失うという悲しい體驗をしたわけだが、余懷がまだまだ詩人としての氣力に溢れているのに對し、姜垓は心身ともに疲れてしまっているかのようである。

なお、桂林はこの年十二月に陥落し、永曆帝はその後南寧へと落ち延びた。姜垓の友人の消息も定かではない。

## b. 亡國感

右のように非常に鬱々とした感情を心に抱いていた姜垓だが、その憂さを晴らすためか余懷に同行してこの年の四月から六月にかけて各地を旅行している。

次に姜垓の名が作品に現れるのは、五月二十七日のことである。余懷は思美草堂なる場所で姜垓と昔話に興じた。思美草堂の詳細は不明であるが、前後關係から考えて蘇州にあった姜垓の庵であろう。余懷はそれから數日の間姜垓および葉襄（字は聖野。？一六五五。復社の社友）とともに三人で過ごしており、二十九日には崑山に行き、「孤舟夜雨歌」を制作して二人に呈した。

六月十一日、余懷は姜垓に誘われて吳縣の玄墓山を訪れている。玄墓山は東晉の郁泰玄の墓がある場所である。姜垓は隱居後ここ吳縣に暮らしていた。その後蘇州の靈巖山に到着した二人はそこで『吳越春秋』の吳と越について語り合つた。余懷が吳の衰亡と越の勃興について論じると、その論に姜垓は「此の論甚だ快なり」と稱賛した。更に余懷は自ら「極論」と稱しながら、古今の亡國について次のように論じている。

皆奸臣が原因で國が滅んだのであって、人君のせいではない。漢の獻帝にもし董卓・曹操がいなかったら、きつと洛陽から遷都するという憂き目にはあわなかつただろう。もし梁の武帝に朱异が（侯景の立場を危う

くさせ)なければ、きつと臺城での恥辱はなかつただろう。唐の玄宗にもし李林甫や楊國忠がいなかつたら、きつと馬嵬で辛酸を嘗めること(楊貴妃が殺害されたこと)はなかつたであろう。宋の徽宗にもし蔡京や王黼がいなかつたら、きつと五國(城)に捕らわれるという辱めはなかつただろう。古を以て今に照らし合わせれば、まるで手本のように明らかである。國を誤らせた奸臣を追論し、伍子胥が死後川に流されたのを憤るのである。

(皆奸臣之由、非人君之過。漢獻若非董卓曹操、豈有播遷之慘。梁武若非朱异、豈有臺城之辱。唐玄若非林甫國忠、豈有馬嵬之辛。宋徽若非蔡京王黼、豈有五國之羞。以古鏡今、朗如龜鑑。追論誤國之奸、怒衝伍胥之濤矣)

この一文は、明末の政治鬭争と、その結果として明が滅んだということについて遠回しに言及したものととれる。これに對する姜垓の回答は載せられていないが、兄姜採の一連の事件を體驗した彼にとって他人事ではなく、恐らく意見を同じくしたに違いない。

### c. 二人の見た夢

その後、六月十五日に吳縣近くの堯峯山を過ぎたところで余懷は姜垓と聯詩を制作している。この日は夕方から暴風と雷雨に見舞われた。二人は船中で一夜を過ごしたが、互いに夢を見たという。余懷は「瓜を割り地面に落とすと龍に變化した(予亦夢割瓜蒂擲地化爲龍)」という夢であり、姜垓は「蛇と鬪う(夢與蛇鬪)」という夢であった。翌日、目が覺めた二人は昨日見た夢について語りあった。そこで同船していた老嫗が捕まえていた一蓮のタウ

ナギを購入し、生きたまま川の中流に投げ込むと、その飛び跳ねる様子が「みずち」がきらきらと輝く姿に見えた。そしてその後、激しかった風雨が収まり、邊りは平穩を取り戻した。そこで「暴風歎」を制作した、<sup>(三十五)</sup>という。

これは明清に流行した放生の風習に拘わるものであるが、特筆すべきは姜垓もこの時「暴風歎」を制作し、更にそれに序文を付けていることである。<sup>(三十六)</sup>その記述は多少順番や表現が異なるものの、余懷の文章と非常によく似ており、同じ語句も見られる。また、夢についても「夜蛇を斬ろうとする夢を見たが、蛇が向きを變えて噛みつき、引きはがすことが出来なかった。このことを非常に氣に病んだ（夜夢斬一蛇、蛇反覆追嚙、不即脫、意甚忌之）」とより詳しく説明を加えている。これが具體的に何を暗示しているのか定かではないが、姜垓に關しては當時の心理狀況と關係があるのかもしれない。その意味では興味深い記述である。本論では紙數の都合上これ以上詳しく述べない。

以上のように『三吳遊覽志』に見られる姜垓は、未だ悲しみと苦しみの中に身を置いてはいるが、その憂さ晴らしが余懷との交遊であり、一方の余懷も姜垓との交遊を通じて憂さを晴らしていたのかもしれない。

### 3. 姜垓を悼む

#### a. 姜垓の死

姜垓は蘇州に隱居後、病氣がちであった。それはやはりどちらかと言うと精神面での衝擊が身體を蝕んでゆく類のものだったのであろう。姜垓は病床の身でありながら、家族のことを思い續けた。順治七（一六五〇）年には難に殉じた父をはじめとする家族の弔いのため、病をおして故郷萊陽に戻り、法要を行った。無事終えたものの、無

理が祟ってか病状が悪化した。そしてとうとう順治十（一六五三）年二月二十四日、姜垓は歸らぬ人となったのである。

余懷は一六五〇年前後に制作した詩をまとめた『五湖游稿』（石湖卷）の序文の冒頭において「昔山東の姜垓と家の通りに面したのきばで朝夕詩を作るのを楽しみとしていた。ああ、その姜垓も死んでしまった（往與山東姜垓望衝對宇、朝夕倡酬以爲娛樂。嗚呼、今垓死矣）」云々と記している。

當然、この序文は姜垓の死後に書かれたということになる。いずれにせよ、余懷にとって姜垓の死が大きな衝撃であつたことが窺える。そして恐らく共時的に青春時代を語り合える人物はこの時他にあまりいなかったのである。

前掲の通り、この石湖卷には姜垓に関する詩が數首收められている。ここでは以下の二首あげておこう。

「吳郡五君詠」五首は吳偉業（梅村）・姜垓・林雲鳳（若撫）・曹溶（秋嶽）・葉襄（聖野）を、「三哀詩」三首は姜垓・申紹芳（維烈）・錢士升（抑之）を詠じた連作の詩である。彼らは大體が東林・復社の關係者である。中でも姜垓は唯一兩方の詩に詠まれている。

### b. 「吳郡五君詠」

まずは「吳郡五君詠」其三を見てみよう。

萊陽産人傑

萊陽 人傑を産し

海嶽纏英靈

海嶽 英靈を纏ふ

崢嶸庚辰榜

鴻文挾天庭

泊乎阨陽九

江山削丹青

流離在吳會

抱疴守沈冥

閨中既邃遠

長謠視明星

鬱鬱松柏茂

未秋豈先零

孤石寫耿介

含華表娉婷

江漢動遊思

冰霜結榛苓

美人淚如雨

哀音不可聽

閉門謝熱客

卧讀離騷經

崢嶸たり庚辰の榜

鴻文 天庭に挾かみけり

陽九に阨くわしめらるるに泊おびて

江山 丹青を削る

流離して吳會に在り

疴やまいを抱かきて沈冥を守る

閨中既に邃遠にして

長謠して明星を視る

鬱鬱として松柏茂り

未だ秋ならずして豈に先に零せんや

孤石 耿介を寫すも

華を含みて娉婷を表す

江漢 遊思を動かさんとするも

冰霜 榛苓を結ぶ

美人 涙雨の如きも

哀音 聽くべからず

門を閉じて 熱客に謝し

卧して讀む 離騷經

〔大意〕 萊陽縣から（あなたのような）人傑が生まれ、天下は優れた人材を得ることとなった。庚辰（崇禎十三（一六四〇）年）の試験で頭角を現し、（あなたの）すばらしい文章は宮中に燦然と輝いた。（そのあなたが）不幸に見舞われ、（あなたという人物の）歴史が削られてしまった。離ればなれになって吳會（吳縣）に棲み、病を患い、（妻を亡くしてから）寢室はすでに遠く、<sup>三十九</sup>長く歌って明星をじっと見つめるばかり。鬱蒼と松柏が茂っているうちは、まだ秋にならずに先に枯れることはない（あなたはまだ老ける年ではない？）。（今のあなたは）孤石が難く操を守る様子を寫しながらも、華を含んで美しさを現しているかのよう。（また）江漢（の風景）が秘めた心を揺り動かそうとしても、（あなたの心は）氷霜が榛苓を被ったまま。美人の涙が雨のように流れても、悲しき音色は聴くことも叶わぬ。（あなたは）門を閉じて俗人を謝絶し、寢そべって離騷經を讀むだけ。

この詩からは、嘗ての姜垓の才能と活力を稱える一方、一連の事件で精根盡き、閉じこもりがちになってしまった友人に對する同情の念と、その才能が發揮されないでいる現状に對する嘆きが見て取れる。

### c. 「三哀詩」

次に「三哀詩」である。姜垓に對する詩はその第一首目に置かれている。長詩のため原文と大意のみ記す。

大業垂伊姜	斯文重鄒魯	河漢揚其波	日月耿萬古	考功表東海	摛詞蔚龍虎
少年賦兩京	高卧吟梁父	煌煌庚辰榜	名魁擢天府	落落官大行	經年閉蓬戶
泊遭陽九厄	顛頓浙江澚	拾橡臺宕間	痛哭拜神禹	流涕授考功	艱難備舟櫓

國破更無家 徒歩將老母 棲遲長洲縣 旅食伯通廡 文酒聊自娛 豈云適樂土  
草堂種松桂 琴樽翳環堵 丘壑幸獨存 長纜奪風雨 豈期年四十 況況嬰二豎  
吁嗟陶謝儔 不得至公輔 剪紙招君魂 呼天竟何補 平生有遺書 絕筆託肺腑  
泉路號孤兒 冥冥享鍾鼓

〔大意〕 その業績は伊尹・姜子牙に匹敵し、その文章は孔孟よりもすばらしい。河漢にその波を揚げ、日月は萬古よりもつとも輝く。(姜)考功は東海に(その才能を)あらわし、言葉を巧みに使ってすぐれた作品を作った。年若くして「兩京の賦」(漢・班固の作)のようなすばらしい作品を作り、高卧しては「梁甫吟」(諸葛亮の作)のような名作を吟じた。燦然と輝く庚辰(四七)の榜、深遠な學問は他者に抜きんできた。志高く偉業を行い、幾年も蓬戸を閉ざしたまま。(そのあなたが)災難に遭い浙江のほとりで憔悴してしまった。あちこちでどんぐりを拾って(餓えを凌ぎ)、痛哭して神禹に拜禮する。考功の職を授かって感涙したが、舟艚を揃えるのに苦勞した。國破れて家も失い、徒歩で老母を率いる有様。長洲縣に隱遁し、伯通の軒下で旅暮らし。詩を作つて涙を呑み、いささか自身で楽しむも、樂土は同じと言えようか。草堂に松や桂を植え、琴と酒だるに圍まれて。丘嶽は幸いにしてまだあるが、長いすきは雨ざらし。どうして予期できようか、四十で病に倒れると。あ、陶(淵明)・謝(靈運)の類は、公輔になることはできなかつた。切り紙であなたの魂を招こうとしても、天に叫ぶも何の助けもない。平生書いていた遺書あり、絶筆後ご子息に託す。(あなたは)黄泉路で孤兒に叫んだことであろう、心して受けよ、と。

余懷はこの詩で前半は姜垓の文才を稱賛し、後半にかけては戦亂後の不遇な暮らしぶりについて詠じている。これはとりも直さず當時余懷自身の置かれていた境遇そのものでもあつた。特に「棲遲長洲縣、旅食伯通廡、文酒聊

自娛、豈云適樂土」の部分などは、同じく安住の地を失って各地を彷徨っている余懷自身にとっても身につまされる思いであつただろう。そして後半部分では、本來ならばまだまだ交遊を續け、文學的な交流を重ねようと思つていた矢先の死に對して、余懷の受けた衝撃と悲しむ様子が窺える。

なお、この詩の「絶筆託肺腑」の部分の注には「臨歿以遺稿囑余選定」とあり、余懷が姜垓の遺作について整理編集を依頼されていたことがわかる。ただし、實際に余懷編集のテキストが制作されたか否かについては不明である。

## おわりに

以上考察してきたように、姜垓の人生の大きな轉換期は、兄姜埰の投獄事件からはじまる一連の災厄であつた。父や家族の死、甲申の變、追つ手からの逃亡、南京陥落など、崇禎の末から清・順治初にかけて、姜垓は心身ともに激しく疲勞した。それがその後の隱居と病氣の原因となつたのは疑うべくもない。一方余懷も郷試の落第から始まり、甲申の變、阮大鍼の東林・復社彈壓、南京からの脱出、各地を放浪、妻(四十二)の死など重大事が次々と起こつた。このような二人の胸中には、共通した感情、たとえば悲しみ、怒り、空虚感というようなものが渦巻いたに違いない。後に二人が再會して楓江で酒宴を開いたのは、單なる宴會ではなくこのようなやらかたない思いを吐露するためだつたのかもしれない。

姜垓の死後、余懷は更に四十年あまりも長く生きた。そして、その最晩年に制作された『板橋雜記』には、かつての若々しい活力に満ちた姜垓の、不幸な事件で失われてしまった文人としての風采を記録している。そして彼を

「風流の余韻」の代表として記したのも、余懷にとつてともに青春時代を過ごした友人であり、古きよき時代の一つの象徴であつたからに違いない。そしてさらに姜垓を含めた『板橋雜記』に記録される多くの人物が戦亂によつて失われてしまい、その思い出を語るに相應しい友人姜垓をも失わせてしまった當時のあらゆる事象に對し、怒りと悲しみを表したのが『板橋雜記』であるとも言えるだろう。余懷が『板橋雜記』を記した動機の一つは、單に失われた狀景を記録に残すという前朝の遺民としての義務感などといったものではなく、人間としての當然の感情が吐露されたものとも言える。それを踏まえた上で、その土臺となつた姜垓との交遊に焦點を充てたのが本論の主旨であつたが、まだまだ不明な點も多い。今後は更に同時代の別の人物を取り上げ、余懷を代表とする明末清初の懷古文學の深奥に少しでも迫りたい。

## 注

- (一) 本稿では、吳震方『說鈴』本『板橋雜記』を使用した。
- (二) 「余懷と妓女―初期作品を中心に―」(大東文化大學『漢學會誌』四十八號・二〇〇九年三月)
- (三) 「余懷と杜甫―余懷作品中における杜甫の影響について―」(大東文化大學『漢學會誌』四十九號・二〇一〇年三月)
- (四) 「萊陽姜公偕繼至傳孺人合葬墓表」(『魏叔子文集外篇』〈中國古典文學基本叢書・中華書局〉卷十八)
- (五) 徐枋『居易堂集』卷十二
- (六) 徐枋『居易堂集』卷十九
- (七) 『流覽堂詩稿殘編』(高洪鈞編『明清遺書五種』北京圖書館出版社編・二〇〇六年十一月)所收。

(八) 姜垓の詩に「母生八人男有四」(「戊子四月歸塗寓居膠東、愴心骨肉死生間隔、聊作七歌以當涕泣云爾」) 前掲『流覽堂詩稿殘編』卷一(二首目)とある。また『明遺民錄』卷三十姜圻の項に「瀉里四子、圻・垓・垓・坡」  
垓・坡」とある。

(九) 「請代兄繫獄疏」(『流覽堂詩稿殘編』)

(十) 前掲魏禧の文章によると、この時雁宕山天臺寺に隱居して佇石山人と號したという。

(十一) 柯愈春編『清人詩文集總目提要』(北京古籍出版社・二〇〇二年)の『二分明月女子集』の項目に「萊陽姜學在妾。能詩畫、善度曲、人譜其事爲秦樓月傳奇、吳綺・毛奇齡・余懷俱有詩詠其事」とある。

(十二) 明末清初の社會と文化研究班編『復社姓氏索引』(京都大學人文科學研究所・一九九五年三月)による。  
なお、同書には同じ萊陽縣出身の者で姜姓の人物が四人おり、一族に連なる人物かも知れないが、詳細は不明である。

(十三) 前掲『流覽堂詩稿殘編』所收。

(十四) 『明詩綜』卷六十九に「詩篇溫潤而恂栗」とある。

(十五) 前掲「萊陽姜公偕繼至傳孺人合葬墓表」に「沈鬱離憂、無愧三百篇之旨」とある。

(十六) 『天啓崇禎兩朝遺詩』小傳に「步趨少陵、多亂離之感焉」とある。

(十七) 手紙の内容については、前掲「余懷と杜甫——余懷作品中における杜甫の影響について」113頁(114頁を参照のこと)。

(十八) 前掲「余懷と杜甫——余懷作品中における杜甫の影響について」116頁以降を参照のこと。

(十九) 『杜工部詩集』卷三

(二十) ともに前掲『流覽堂詩稿殘編』卷一所收

(二十一) 『板橋雜記』中卷冒頭。

(二十二) 『板橋雜記』中卷・冒頭に「余生萬曆末年、其與四方賓客交遊。及入范大司馬蓮花幕中爲平安書記者、乃在崇禎庚辛以後、曲中名妓、如朱斗兒徐翩翩・馬湘蘭者、皆不得而見之矣」とある。

(二十三) 例えば、「嶧桐集序」(『嶧桐集』文集十卷詩集十卷附錄四卷(『貴池二妙集』所收))に以下のように記されている。「……己、庚之際、人物聚於留都。范相國景文爲大司馬、馮大司馬元飈爲大銀臺、張僉都瑋爲少京兆。其他如詹侍郎兆恆爲御史、錢副使棟爲銓曹。而優游林下、坐卧東山者、則有金先生光宸、周先生鏞。其四方流寓之士則有和州戴推官重、桐城方學士以智、孫職方臨、山東姜司馬塚、姜考功垓輩、麾扇過江、文酒跌宕。而懷與王孝廉潢、錢茂才雁二三同人、進退揖讓於其間。……」(日本語譯については前掲「余懷と妓女―初期作品を中心に―」153頁154頁を参照)

(二十四) 全て前掲『余懷全集』に収録されている。

(二十五) 『板橋雜記』中卷・李十娘「歲壬午入棘闈、媚日以金錢瓊投卜余中否。及榜發落第。余乃憤鬱成疾。避棲霞山寺、經年不相聞矣」

(二十六) 『楓江酒船詩』(『余懷集』第二册(『福建叢書』三之三・廣陵書社・二〇〇五年)所收)これについて、清・蔣光煦の『東湖叢記』卷五によると、元々余懷の作品集で『江山集』なるものがあり、そこには『平生蕭瑟詩』、『三吳遊覽志』、『楓江酒船詩』、『梅花詩』の四種が収められていたという。これらは皆同時期の作品であると考えられる。

(二十七) 判讀不明字について、本稿では活字本の李金堂編校『余懷全集』(上海古籍出版社・二〇一一年)に

よつて文字を補つた。

(二十八) 前掲『楓江酒船詩』所收。

(二十九) 「今十季間、諸子多墓木拱矣。爾止賣卜浦二、鑑在密之亦遠滯天末、僕與澹心、雖年齒僅及壯。於諸子中亦如靈光殿也。今茲之聚、能不悲哉」とある。

(三十) 「楓江酒船歌贈余澹心」(『愚菴小集』卷三(清人別集叢刊・上海古籍出版社))

(三十一) 「和朱秀才鶴齡見寄」(『流覽堂詩稿殘編』卷六) なお、朱鶴齡にも「酬姜如須見寄」(『愚庵小集』卷五)があるが、この和詩であるかは不明である。

(三十二) 何宗美『明末清初文人結社研究』(南開大學出版社・二〇〇三年一月) 三二一頁参照。

(三十三) 前注著書三一〇頁参照。

(三十四) 王禹偁『五代史闕文』に司空圖の項目があり、以下姜垓はこれを踏まえて論じたと考えられる。

(三十五) 原文「初十。晴。搖棹至半塘。過姜如須舊宅。作詩寄之」

(三十六) 『三吳遊覽志』(臺北進興書局本『筆記小説大觀』第二十四冊所收)に「薄暮、至橫塘、風雨颺忽、電光繞船、船幾沒。舟人惶遽、將凌陽侯之泛濫、托彭咸之所居矣。先是、如須夢與蛇鬪、朝而告豫。豫亦夢割瓜蒂擲地化爲龍。及是、追憶昨夢、而隨行老嫗云、舟有捕鱗一斗。趣贖以金、投之中流、似有蛟螭陸離上下。須臾、風恬浪怡、星呈月露。異哉。作暴風嘆」とある。

(三十七) 『流覽堂詩稿殘編』卷三

(三十八) 以下序文のみ原文を載せる。「庚寅六月望前、僕與余澹心游於鄧尉、閱四日返。夜夢斬一蛇、蛇反覆追嚙、不即脫、意甚忌之。早起方瞠目獨語、會告澹心。是夕歸塗至跨塘橋、忽風雨大作、沙鳴岸圻、惟電

光繞船、船幾没、咸駭叫。僕因述昨夢、有老媪知榜人陰藏捕鱔一甕、贖以金急投之中流、騰躍有聲、宛若蛟螭乘電光而逝。須臾、風恬浪恰、軒豁呈露、神物所在、感動地天。異哉、乃各作暴風以紀變云。

(三十九) 『楚辭』卷一「離騷」に「閨中既已邃遠兮」とある。

(四十) 朱保炯・謝沛澤『明清進士題名碑錄索引』(上海古籍出版社・一九八〇年)によると、姜垓は崇禎十三年(一六四〇年)庚辰、第三甲にある。

(四十二) 余懷が甲申の變直後に制作した「在長州縣做杜甫七歌作」四首目に見える。